

## 失敗もまた良し。人生を楽しむ。



### 瞬間に生きる

「楽しむために生まれた」と笑顔で語る高久和男氏は、人が「つらい」とか「大変」と思うようなことも「楽しい」と言いきってしまう人生の達人だ。

『パリの宮子』にとって、かつての宇都宮市街地は楽しくてしかたがなかったそう。『まさに、ワンダーランドでした』という。五本丸公園の堀で水遊びをし、草の生い茂る中を駆けずり回り、芝居小屋や見世物小屋に魅せられ、ネオンに輝くオリオン通りを闊歩する。毎日を、わくわくと過ごす少年の姿が目に見えよった。

そして、自称「無くし物名人」は、夢中で遊んでフンドセルも忘れてしまうほど。「瞬間に生きる、瞬間に最善を尽くす男なんです」と笑う。それは、集中力に長けていることの裏返し。今でも、ひとつの事に目がいくと、他の事は忘れてしまつたのだとか。

### ひとつの見方にとらわれない

「自然の中にいる自分、自然にはかなわないけど自然と格闘している自分が好き」という気持ちだが、様々な自然との触れあいを育んできた。中学時代はカメラを手に自然を写しに出かけた。高2から山登りを



始め、山岳部を立ち上げるほど。登山好きは今でも変わらない。本人いわく「今は穂高、白馬など北アルプスにこつて、アルピニストなんだよ」。

中学で添乗員を夢見たほど、海外にも強い興味を持ち、今までに数多くの国を訪れた。その度に文化の違いを知る。「中国の田舎町では、腹を満たすために明るく楽しく何でも食べているのに、インドでは人が路上にゴロゴロ寝ていて餓死するとしても、決して野良牛や野良犬を食へない。かたやスペインでは闘牛で最も華麗に牛を倒してしまう。何が良く何が悪いか、国や土地、文化によって価値観が変わる。時代によつても価値観は変わる。時代によつても価値観は変わる。あまり、ひとつの見方にとらわれずに生きよう」と悟る。それから、は、全てをポジティブに変化

いやと思った」ほど。その柔軟性には脱帽だ。

「ここ15年ほど前からは、スキューバダイビングにもはまり、仲間と一緒に年一回東南アジアの海中を満喫。10年前には1級小型船舶操縦士の免許も取得。一方、1年前に音楽グループを結成し、初めてドラマに挑戦。既にライブを2〜3回やっている。言いだしつべは、もちろん高久氏。ライブは聞くより、演奏する方が

### Profile 高久 和男 (たかく かずお)

姉、双子の妹と共に宇都宮市旭町に生まれ育つ。大学卒業後、父親である先代社長が昭和40年4月1日に創設したイトランド株式会社に入社。セールス能力を発揮し、業績アップに貢献。1988年に社内に就任後も県内での事業拡大を図り、さらに東京など他県にも進出。県内レストラン「十五家」やイタリアンレストラン「ヴィスコンティ・ドゥーエ」など店舗数は400店ほど。食のプロを養成する専門学校「三友学園」など地域に密着したフードビジネスを展開している。一方、人材派遣会社など異業種にも取り組む。



「お茶の稽古で出るお菓子は最高に美味しいんだよ」と茶道の裏千家に通う。読書も好きで、歴史ものの文化人類学などを中心にあらゆるジャンルを読む。

### 喰わず嫌いをしない

ただでも忙しい立場にありながら、こんなにもたくさんの方ができるのかと問うと「忙しい時の方がいい。集中するから」と。そして「下手に考えていても、ろくな結論は出ない。本当に良い物、楽しいことに触れることで、本当の自分が見つかり、やりたい事が見えてくる」そうだ。

つまり、「人間には潜在能力が多く、論理より直感を磨くことで新しい世界(能力)が広がる。それには、好き嫌いをせずに良い物に触れること。たくさん人と接し、いい音楽に触れ、美術館にでかけ、美味しい物を食べ、いろいろな世界を見る。そして、楽しむ。そんな体験を通してグローバルな視点が育ち、実は本当の自分らしさが見えてくる」。なるほどと納得。

これは、まちづくりににも言えることだとか。他の街を知ること地元らしさを発見し、その土地の文化や歴史を生かしたオンリーワンの街が見えてくる。

「失敗も山ほどある。でも後で笑い話にしちゃう。さりとて言ったそのひと言に、どれほどの想いが詰まっているのさ。『失敗もまた良し』という姿勢こそが、人生を楽しむ秘訣かもしれない。

